

尾崎知光著

近代文章の黎明

——「葉亭」浮雲」の場合——

桜楓社



研 究 叢 書 18 「近代文章の黎明」

昭和四十二年五月二十日 初版印刷
昭和四十二年五月二十五日 初版発行

定価 六百八十円

著 者 尾崎 知 光

発 行 者 南 雲 克 雄

印 刷 者 平 山 盛 次

株式会社 桜 楓 社

東京都千代田区神田猿樂町二ノ五
電話東京二五・五六〇振替東京八〇〇

は し が き

近代の国語史において、最も注目しなければならない点は何でしょうか。それに対する解答は人によって異なると思いますが、言語生活全般については、読み書きする層が拡大したと、話し言葉としての共通語がほぼ確立し広く浸透したこと、表現の方法としてラジオ、テレビが大きく参加してきたことなどは、誰にもまず気づかれることであると思います。それと共に、書き言葉については共通語にもとづく口語文が成立したこと、それによる新聞、雑誌、書籍が広範囲に普及したことを指摘しなければならぬでしょう。

口語文発達の過程は、明治時代を通じて言文一致というかたちで多くの人々によって努力がなされてきたことは、周知のところ です。そしてそれが漸く今日のような状態になったのは、まだ近々五十年ぐらい前のことであり、それはたとえば、明治以来百年の新聞をみても直ちに判明することだと思います。然し、言文一致の提唱は古くから行なわれ、小説の方面では、二葉亭、美妙などがその先駆者とされているのです。このことはあまりにも有名なところですが、

意外にもそれらの作品の言語上の分析は十分なされていないように思われます。それらの作家の文章がその後のものに大きな影響を与えたことを考えますと、これは近代の国語史の問題としてゆるがせにできないものであると思います。

二葉亭の「浮雲」はそうした作品の一番最初の栄誉をになうべきものです。然しこの作品は近代文学史上の位置があまりに重要なため、かえって言語の面に対する注意がおろそかにされてきたように感ぜられます。今、「浮雲」を虚心により、素朴な態度で、その言葉を眺めてみました。それは近代文体論の、個性的な作品の文学言語の研究という方法によってではなく、初期の言文一致の文章としての位置において試みてみました。従って、文章の言語事実をただ摘出し、記述するだけに終始し、極めて無味乾燥な、つまらぬ結果となってしまうましたが、こうした作業もこのエポックメーカーキングな作品にはまた必要であるように、私には思われるのです。「浮雲」の問題を解明するためには、その周囲のさらに広い範囲の研究、調査を必要とするはずで、それらのすぐれた成果も専門の方々の間にいくつか見られます。それを承知で、この作品だけに終始し、極めて素朴で、平板な記述に終ってしまいましたのは、全く私の力の限界を知ったからに外なりません。しかもその調査も不完全で、まだ残された問題もありますが、

なかなかまとまりそうにもありませんので一まずこの形にとどめました。従つて、これは専門の方には御覧いただけるようなものではないこと、もとより自覚しております。軽い気持でお読みいただき、何かの御参考にでもしていただければ幸いと存じます。

この小著がまとめられるについては、私の大学での曾つての指導生の太田（旧姓山田）真知子さんの同じ題目での卒業論文がその機縁になりました。ここに一言し、今後若い方々がこうした方面に研究をすすめられることにもなればとこいねがつております。

近代文章の黎明 目次

はしがき

第一章 序 説	九
---------	---

第二章 二葉亭の言語文章観	一四
---------------	----

一、はじめに	一四
--------	----

二、言文一致の論	一五
----------	----

三、用語論	二三
-------	----

四、文調論	三一
-------	----

五、描写論	三六
-------	----

六、結語——文章道	四〇
-----------	----

附、「浮雲」に対する同時代の意見	四二
------------------	----

第三章 「浮雲」の文章	四七
-------------	----

一、はじめに	四七
--------	----

二、文章全体に関する問題……………	四八
主題及び構想について……………	四九
叙述の方法について……………	五二
(1)地の文について52	
(2)会話文について62	
三、文に関する問題……………	六六
文末表現について……………	六六
文の長さについて……………	七六
四、表記符号に於ける問題……………	八一
括弧の用法……………	八一
——と……の用法……………	八五
／？ゝの用法……………	八九
五、語句に関する問題……………	九三

句の問題	九三
(1) 文語的表現	93
(2) 漢文的表現	101
(3) 古典語、雅語的表現	104
(4) 俗語的表現	107
(5) 新奇表現	117
語の問題	一二六
(1) 漢語漢字	126
(2) 俗語話語	134
(3) 外來語外國語	154
第四章 結語	一五九
補遺	一六三
附錄「からについて」	一七五

第一章 序 説

文章における近代とはなんでしょう。それは要するに、創作に限らず、すべての文章表現において、筆者の思想、感情、個性などを自由に表現できるような文章の成立をいうのであらうと思われます。そして、そうした意味での個性的な文体をもつ文章の出現を阻んでいたものの一つは、明治の初期から中期まで猶残存していた、所謂「雅文体」「漢文体」「和漢混淆文体」「雅俗折衷文体」等の類型的な文章観であり、そうした鑄型にはめられた文章であったということができます。それに対して、欧文脈の流入と言文一致は、従来の文章についての考え方を反省させるものとして、あるいは真の近代的文章を成立させる先駆的なものとして重大な役割を果してきました。ここに「欧文脈の流入」というのは、単なる外来語・翻訳語の摂取というにとどまらず、欧文脈的発想法にまでひろげて考えてみなくてはなりません。たとえば、はなはだ著名な事例ですが、田山花袋が「近代の小説」の中で、二葉亭の「あひびき」に接したことを

「……そしてその翻訳が、その翻訳の言文一致が、いかに不思議な感じを当時の文学青年

に与へたか。いかに珍奇と驚異との感じをその時の知識階級に与へたか。現に、私などもそれを見て驚愕の目を瞠つたものの一人であつた。『ふむ……かういふ文章も書けば書けるんだ。かういふ風に細かに、綿密に！正確に！かう私は思はずにはゐられなかつた。想像してもわかることである。あの当時の漢文崩しの文章の中に、または近松張、篁村張と言つた、句読も何もないやうなべらべらとのつべらぼうに長く長くばかりつづいてゐるやうな文章の中に、あの？や！や、——の多い文章が出たのであるから。また、句読の短かい、曲折の多い、天然を描いた文章が出たのであるから。

私達当時の文学青年は、何遍あれを繰返して読んだか知れなかつた。母親にも読んできかせれば、兄や弟にも読んできかせた。ことに、あの最後の『あゝ秋だ！空車の音が虚空に響きわたつた……』といふあたりは、何とも言はれない感じを私に誘つた。否、かなりに後までも、野原に行きなどすると、いつも私はそれを思ひ出した。」

と回想しているのはそれをよく物語るものといふことができましよう。明治の新文学は「小説神髓」によって方向を決せられたといわれています。その文章表現における決定的な方向は、欧文脈を主流とし、言と文との一致をはかる言文一致によって指し示されたのであります。

明治中期以後、写実主義、自然主義が盛行するに及び、文芸上の主義、思想上の内容が小説における最も重大な関心事となり、文章に対する注意は乏しくなつて行く傾きもありました。

しかし一方では、各自の個性と印象とを明確に鮮明に表現しようとして、個人的文体を創始する動きは、本人が意図する与否にかかわらず次第に高まって行つたのです。従つて眞の意味での近代の文章とは、この時代以後のものとするべきであると思われまゝ。ただし、そうした近代が成立する前提として、言文一致ということが我が国においては何をおいても必要となつていました。つまり言文一致の表現は、個人の思想感情を思いのままに盛ることのできる、いわば器物としての重要な役割を担つていたのであつて、近代の日本文章史上、特に注目されなければならぬ所以はここにあるのです。さらに、言文一致の成立後においては、創作上の文章はそれぞれの作家の個人の文体に分化していつて、文章史の問題として概括的にとらえることが困難なほど複雑化し、進展しました。即ち近代文章史上の問題は、言文一致で一往完了し、さらに質的な転換を遂げたのであつて、この意味においても、言文一致は近代文章史上の最大の問題といつてよいと思われるのです。

それでは、言文一致はどういうことでしょうか。それは、前代の文章が、教育上からも表現上からも著しく不便であることから、幕末、明治の先覚者達が主唱したもので、当時の西洋文明摂取の姿勢と同様、多分に功利主義的、実利主義的な考え方に根ざしたものでありました。従つて問題とした点も、「国家の大本は国民の教育にして其教育は士民を論ぜず、国民に普からしめ之を普からしめんには成る可く簡易なる文字文章を用ひざる可からず」とか「今日普通

のツカマツル、ゴザルの言語を用ひ、之に一定の法則を置く」とか「教育なき百姓町人輩に分るのみならず、山出の下女をして障子越に聞かしむるも其何なるかを知る位」とか「アベセ二十六字ヲ知り苟モ綴字ノ法ト呼法トヲ学ベバ、兒女モ亦男子ノ書ヲ読ミ、鄙夫モ君子ノ書ヲ読ミ且自ラ其意見ヲ書クヲ得ベシ」とかいふように、難解な漢字を廃止もしくは節減し、書きことはを話し言葉に一致させることによつて、教育上、表現上の便宜を計ろうとするものでありました。要するに、文法上、語彙上、用字上の問題として取り上げられたのであり、言文一致の本質はここに存するのであつて、明治二十年代に多くの文学者達の試みた創作上の言文一致も亦、主として文末語、漢語、俗語、用字などを中心的な問題としたものであつたのです。

言文一致がこのような性格をもつ以上、その文章の研究法も自らそれに適したものが要請されるはずです。それは、今日の普通に行なわれている文体論、即ち、作品の表現を通して作家の個性表現を追求し、そうして得られた独自の表現事実の集積の奥に、作家の性格、個性を解明し、両者の密接な関係を論証するような研究法の把握しうる問題とは別の対象を中心にするものでなくてはならないのです。文法上、語彙上の問題は言語の一般的普遍的事項であつて、非個性的な性格が著しいのです。それは文体論者からみれば、問題前の問題と評せられるかも知れませんが、なおそうした文体論をも支える基礎的な根底であり、しかも言文一致の文章に對して本来的なものであるべきことは、上述のところから明らかであるといえます。

以上述べた立場から、ここで、言文一致の小説の代表作品といわれている「浮雲」の文章をとり上げ、それがどのような言文一致体をとっているか、又それがどの程度まで完成されたものであるか、等を、主として文法的、語彙的事実に基き、具体的に検討し、それを通して当時の言文一致文体がどのようなものであったかを考える手がかりにしたいと思います。勿論、この作品は、文学史上はなほだ著名であり、作品の文芸性、思想性、その他さまざまの点において問題も豊富で、その上、文章を通して作家の性格を追求するという、近代文体論的な接近も可能なはずです。ただ当時の人々にも大きな反響を起し、後のものにも著しい影響を与えたこの作品の文章が、言文一致文としての立場から詳細に検討されるだけの価値のあることは疑いのないところでしょう。

第二章 二葉亭の言語文章観

一、はじめに

二葉亭が明治二十年に「浮雲」を著わしたことは、時代からいっても、彼の年齢からいっても、まさに近代文学史の奇蹟でありました。今、問題をもっぱら文章に限定しても、「浮雲」のそれは、「あひどき」「めぐりあひ」の翻訳文同様、同時代の人々の驚嘆の的であつたのです。内田魯庵もいのように、「浮雲」は「単に文章の一事だけでも今日行はれてゐる小説文体の基礎を築いた」（「思い出す人々」）画期的なものであるといえます。しかし、そうしたものであればあるほど、その文章を書くにあつての作者の苦勞が如何に大きかつたかは容易に想像できると思います。明治二十年前後は、坪内逍遙の言葉に従えば、表現苦の時代であり、「徳川期の旧文章以外に、新思想を表現すべき何等の新様式もなかつた」当時の事情は「口語完成以後に生れた人達の夢想し得ないこと」であつたといわれています。そしてこれは二葉亭にあつては「其思想がいはば急にロシヤ式に化せられたにも拘らずそれを言ひ現す文章としては、